

2 展示

[概 要]

歴博は、歴史や文化に関する資料・情報の収集、整理、保存、公開という一連の機能を有する大学共同利用機関であり、特に、研究資源の収集と研究と展示とを有機的に連関させる「博物館型研究統合」というスタイルで、研究の成果および情報の発信をおこなっている。展示については、総合展示および企画展示、特集展示、くらしの植物苑における特別企画、人間文化研究機構の基盤機関が連携して展示を企画・実施する連携展示などをその具体的な活動として挙げることができる。

2020年度の事業として、最初に記しておくべきは、2025年3月オープンを予定する第5・第6室リニューアルの基本設計が完了したことである。

展示においては、新・特集展示として「海の帝国琉球—八重山・宮古・奄美からみた中世—」（2021年3月16日～2021年5月9日）を開催した。本展示は2015年から行われた基盤研究「中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究」の成果を公開するものであり、14世紀代からの活発に行われてきた東アジア海域世界での交易の中心とであった海洋国家・琉球の帝國的側面に視点を据え、八重山・宮古や奄美といった周辺地域から琉球を捉え直したものであった。本展示はその展示内容や、積極的なSNS活用を行ったこともあいまって、非常に好評を博した展示となった。

また、企画展示については例年3回開催されているが、本年度は上記の新・特集展示の開催や新型コロナウイルス感染症拡大防止の影響を受けて夏開催予定の展示が延期されたことにより、秋の「性差（ジェンダー）の日本史」（2020年10月6日～12月6日）のみとなった。本展示は本列島社会の長い歴史のなかで、「歴」として存在しながら「史」に記録されることの少なかった女性たちの姿を掘り起こす女性史研究を経て、「なぜ、男女で区別するようになったのか？」「男女の区別のなかで人びとはどう生きてきたのか？」という問いを基として、ジェンダーが日本社会の歴史のなかでどんな意味をもち、どう変化してきたのかを問う意欲的な歴史展示となった。

特集展示としては7つの展示が開催された。第1展示室の特集展示として「庫外正倉院文書と盤龍鏡—井上辰雄氏蒐集資料展」（2020年10月13日～11月15日）第3展示室の特集展示「『もの』からみる近世」として、「大津絵と江戸の出版」（2020年8月4日～9月6日）、「海を渡った漆器—輸出漆器の技法」（2020年12月15日～2021年2月7日）、「桜の意匠」（2021年3月16日～4月11日）、第4展示室の特集展示として、「日本の食の風景—「そとたべ」の伝統—」（2020年9月15日～11月29日）、「アイヌ文化へのまなざし N.G.マンローの写真コレクションを中心に」（2020年12月22日～2021年5月9日）、そして、企画展示室の特集展示（国際展示）として、「東アジアを駆け抜けた身体（からだ）—スポーツの近代—」（2021年1月26日～3月14日）である。

くらしの植物苑では特別企画としては、伝統の朝顔（2020年7月28日～9月6日）、伝統の古典菊（2020年10月27日～11月29日）、冬の華・サザンカ（2020年12月1日～2021年1月31日）を開催した。

展示担当 小瀬戸 恵美

企画展示等の実施

企画展示

「性差の日本史」

2020年10月6日日～12月6日

新・特集展示

「海の帝国琉球—八重山・宮古・奄美からみた中世—」

2021年3月16日～2021年5月9日

くらしの植物苑特別企画 「伝統の桜草」	2020年4月14日～5月6日 ※新型コロナウイルス感染拡大防止にかかる臨時休苑のため中止
「伝統の朝顔」	2020年7月28日～9月6日
「伝統の古典菊」	2020年10月27日～11月29日
「冬の華・サザンカ」	2020年12月1日～2021年1月31日

特集展示

第1展示室 特集展示

「庫外正倉院文書と盤龍鏡一井上辰雄氏蒐集資料展」	2020年10月13日（火）～11月15日
--------------------------	-----------------------

第3展示室 特集展示「もの」からみる近世

「大津絵と江戸の出版」	2020年8月4日～9月6日
「海を渡った漆器—輸出漆器の技法」	2020年12月15日～2021年2月7日
「桜の意匠」	2021年3月16日～4月11日

第4展示室 特集展示

「日本の食の風景—「そとたべ」の伝統—」	2020年9月15日～11月29日
「アイヌ文化へのまなざし N.G.マンローの写真コレクションを中心に」	2020年12月22日～2021年5月9日

企画展示室 特集展示（国際展示）

「東アジアを駆け抜けた身体—スポーツの近代—」	2021年1月26日～3月14日
-------------------------	------------------

[総合展示リニューアル]

〈総合展示新構築〉

1. 第5室・第6室リニューアル委員会

(1) 概要

昨年度末に新型コロナウイルスの感染拡大防止のため延期した全体会議を、6月20日にオンライン会議として開催した。全体会議では、①委員の変更、②現在の進捗状況と今後のスケジュール、③基本方針及び展示構成案の修正について協議した。9月28日には展示設計企画提案聴講会及び審査会を開催し、展示設計業者を選定した。10月からは展示設計業者とブロックごとに検討を重ね、3月31日に展示設計業者から基本設計が納品された。この他、リニューアルに関わる資料購入や複製製作も順次進め、加えて第6展示室の記録映像の制作も行った。

(2) リニューアル委員会（全体会議）

2020年6月20日 第1回全体会議（オンライン会議）

(3) リニューアル委員会（館内打合せ）

2020年4月16日、5月13日、7月21日、7月28日（メール審議）、9月8日、10月13日、11月20日（オンライン）、12月15日、2021年1月19日（オンライン）、2月9日（オンライン）、3月9日（オンライン）

(4) 展示設計業者との打合せ

2020年10月14日、10月28日、10月30日、11月5日、12月9日、12月10日、12月18日、2021年1月18日、2月5日、2月12日、2月17日

[企画展示]

ジェンダー 「性差の日本史」

2020年10月6日～12月6日（54日間）

1. 展示趣旨

歴史学にジェンダー概念が導入されてから四半世紀が経過し、日本史分野でも、歴史に埋もれてきた女性の実態の解明をはじめ、多様な性のあり方や、男女の区分という思考そのものの成立を問うなど、幅広い視野からのジェンダー史研究が進められている。本展示は、このような研究動向をふまえ、以下の三つの課題に基づいて実施するものである。

- ①2016～2018年度の国立歴史民俗博物館基盤研究「日本列島社会の歴史とジェンダー」の具体的な研究内容を、「歴史叙述としての展示とジェンダー」についての考察をふまえ効果的に発信する。
- ②2017年度歴博国際研究集会「歴史展示におけるジェンダーを問うHow is Gender Represented in Historical Exhibitions?」で明らかになった、海外のナショナルミュージアムと比べたときの日本の歴史展示におけるジェンダー視点欠如という課題に応えるものとする。
- ③ジェンダーギャップ指数120位（2021年WEFによる）という日本社会の現状に対し、歴史学の立場からその歴史的背景と解決への展望を展示によって示す。

上記の課題に沿って、「政治空間における男女」、「くらしと仕事のジェンダー」、「性の売買と社会」の三つの柱を設定し展示を構成した。

「政治空間における男女」では、古代から近現代までの中央と地方の政治空間における男女のあり方とその変化に着目し、「くらしと仕事のジェンダー」では、さまざまな生活と労働の場における男女の役割や位置づけの変容を探った。さらに、人間を根底から左右する性について、「性の売買と社会」では、性の売買がその社会の特質といかなる関係にあるのかという点に焦点を絞り、それぞれの時代の政治・社会やジェンダーの構造と深く結びついて「性の売買」が行われてきたことを示した。

政治、くらしと仕事、性にとどまらず、ジェンダーは歴史のあらゆる場面で、無意識のうちに人びとを強く捉えている。本展示は、ジェンダーをめぐる葛藤のなかで生きた人びとの経験を具体的に掘り上げ、来館者が歴史に触れる面白さを実感し、ジェンダーの視点から現代社会を歴史的に問い直す場となることを目指すものである。また、このような展示実践は、歴博における研究成果を効果的に発信すると同時に、歴博におけるこれまでの研究へのジェンダー視点導入の意義を提起するものともなる。

なお、本展示は、①のほか、2019～2021年度国立歴史民俗博物館基幹研究「近代日本における産業・労働の展開とジェンダー」、JSPS科研費基盤研究(B)19H01314「『隠し売女』から『淫売女』へ—近世近代移行期における売春観の変容」(研究代表者横山百合子)、同基盤研究(C)25370795「近世遊廓の構造とその社会的基盤」(同)の成果による。

2. 展示構成と主な展示資料

展示構成

プロローグ 歴史のなかのジェンダー

第1章 古代社会の男女

第2章 中世の政治と男女

第3章 中世の家と宗教

第4章 仕事とくらしのジェンダー—中世から近世へ—

第5章 分離から排除へ—近世・近代の政治空間とジェンダーの変容—

第6章 性の売買と社会

第7章 仕事とくらしのジェンダー—近代から現代へ—

エピローグ ジェンダーを超えて—村木厚子さんに聞く

主な展示資料

- ・甲塚古墳出土埴輪（下野市教育委員会蔵）
- ・青谷横木遺跡出土板絵・人形・勸請板・木簡（鳥取県埋蔵文化財センター蔵）
- ・東山名所図屏風（本館蔵）
- ・洛中洛外図屏風歴博甲本（複製 原品：本館蔵）

- ・高山寺文書屏風（八条院庁文書）（本館蔵）
- ・地藏菩薩立像（含：胎内納入品）（本館蔵）
- ・近世職人尽絵詞（東京国立博物館蔵）
- ・江戸上屋敷絵図（仙台藩）（仙台市博物館蔵）
- ・お縫屋藤七抱え遊女お殿大夫打掛（みくに龍翔館蔵）
- ・遊女書状（須坂市文書館蔵）
- ・梅本記（東北大学附属図書館蔵）
- ・高橋由一画「美人（花魁）」（東京藝術大学蔵）
- ・東京府文書「娼妓解放」（東京都公文書館蔵）
- ・ブランゲ文庫ポスター（複製 現品：メリーランド大学蔵）
- ・八日市町清定楼家具・調度（大阪人権博物館・滋賀県立琵琶湖博物館蔵）
- ・通信省判任官関係資料（個人蔵）
- ・山本作兵衛画文（田川市石炭・歴史博物館蔵）

3. 刊行物

展示図録（A4版 320頁）

展示解説シート（A4版 4頁）

広報用ポスター，チラシ

4. 関連行事

メディア向け内覧会 10月5日（月）

3. 成果と課題

<成果>

（1）本展示は、コロナ禍のさまざまな制約下での開催となったが、館内教職員の協力と細心の配慮を得て、大きな事故なく、感染を防ぎながら最後まで開催することができた。

（2）運営にあたっては、予約制と入場数制限による来館者数の制限を行い、展示ガイド、ピアノ演奏を含む歴博フォーラム第113回「音楽と女性たち「天使のピアノ」とともに」、国際研究集会「ジェンダーからみる歴史展示—韓国・アメリカ・台湾、そして日本—（仮）」、関連する3つの歴博講演会、古代機織ワークショップなど関連事業もすべて中止、成果発信や広報には大きな制約が課せられた。一方、これらの制約を乗り越えるため、ツイッターによる広報と反響の収集、ユーチューブによるフォーラム代替番組、ホームページ上の音声ガイド、非接触型の体験展示技法の開発、インターネット番組ニコニコ美術館放送など、これまでとは形を変えた積極的な情報発信を行った。これらの取り組みは、当初、モノを見る・体験するという博物館本来の機能の制約にたいする補い・代替として位置付けたものであったが、実際には、博物館と来館者をつなぐ双方向的なコミュニケーションツールとして大きな役割を果たすこととなった。最終的には、20745人の来館者を迎えたほか、新聞、雑誌、ウェブメディアにも多数取り上げられ、会場アンケート数1146、展示の公式ツイッターのフォロワー数5300余、図録発行数6刷となり、閉幕後も図録の購入が続くという、想定を大きく超える反響と関心を得ることができた。

（3）展示内容にかかわる成果については、1. 展示趣旨で述べた①②③の課題に沿って記す。

①について。本展は、『国立歴史民俗博物館研究報告』特集号に投稿された論文の内容（2021年度刊行予定）を軸に、近年論文化されたもの、資料自体は周知であるがそれにジェンダー視点からの新たな解釈を施したもの、まったくの新出資料などを加えて構成したもので、新たな研究成果の発信という点に意義がある。また、アンケートやSNSによれば、多くの来館者が、展示全体を見ることで、“かつては女性の地位は低かったが、近代にむけて少しずつ向上してきた”という一般に流布している常識を見直したり、総合展示をジェンダーの視点に立って批評的に見学したりしていることが観察された。この点で、展示という形態は、個々のテーマや時代を超えて市民との対話を促し、歴史学研究的意義を広く発信する場になり得ることも明らかになった。

②について。海外の博物館ではジェンダーをテーマとする展示は珍しくはないが、日本ではジェンダーをテーマとする大規模な歴史展示は本展が初めてであり、本展は、歴史学界や博物館だけでなく、広く社会的な問題提起をなすものとなった。一方、歴史博物館におけるジェンダー視点の導入は大きく遅れてはいるが、文字史料が比較的豊富に存在し、長期にわたってジェンダーの変化をみることができるという点で、日本列島社会に固有の有利な条件があることも確認できた。

③について。日本におけるジェンダーギャップの解消という社会的課題と歴史展示の関係については、二つの段階にわけて考えたい。展示準備過程における主催者の意図は、律令国家の形成期に男女の区分が国家体制として確立され、その後、政治空間や仕事、労働、性の諸分野で区分の意味や男女の役割・規範が変容することをできるだけ具体的に提示するところにあった。また、それによって、ジェンダーは作られ、変わるものであること、現代社会における男女の役割や規範も変わる可能性をもつことを提示したいと考えていた。これは、エピローグにおける村木厚子氏の発言（「制度で排除されたものは、また制度で取り込んでいくことができる」）にも繋がる、どちらかといえば政治的・制度的変化に比重を置いた見通しに基づいていた。

しかし、展示を開催するなかで、特に若い世代の来館者には、そのような問題意識とはやや異なる関心があることもわかってきた。例えば、来館者数（アンケートでみるならば、男女比1：2、20代が最多で31%、10代と70代以上は、10%未満、それ以外は10～20%未満）のピークをなす20～30代の人びとのジェンダーに関わる葛藤は、法的な平等が実現されているにもかかわらず存在する違和感や痛み、苦悩であり、多くの人びとが制度の平等の先にある意識の問題に直面していることが、SNSなどを通じて浮かび上がってきた。この点からみると、若年世代にとって、本展示は、具体的な制度の変化を知るだけでなく、長い歴史のなかで自分も生きているのだと感じ、歴史を自分事としてとらえ、自らを客観化し固定的な価値観を反転させる場として受け止められたと考えられる。「自分には2000年の御先祖様ががついている」（ツイッター）といった感想に見られるように、③の課題は、展示者の意図をやや超える形で果たされ、予想以上の反響を呼んだ原因の一つとなったと考える。

以上、本展示では設定した課題①②③におおよそ応えることができたと考えているが、当初想定していなかった成果として、「ジェンダー史の資料という特別な資料があるわけではなく、資料をジェンダーの視点から読み直すことでジェンダーの展示が可能になる」ことを、各地の歴史博物館に向けて発信することができた点をあげておきたい。その結果、本展示をうけて、佐倉市立和田ふるさと館開催機織の展示が行われたほか、2021年夏、鳥取県開催のジェンダー視点をふまえた古代史シンポジウムなどが予定されている。

<反省点と今後の課題>

第一の反省点は、展示準備の過程で、必要な作業量を的確に把握できず、準備や図録の執筆／校正が遅れがちになり、事務担当者にも大きな負担をかけることとなった点である。<成果>で述べたインターネットによる情報発信も、事前に十分に検討し計画的に行ったわけではなく、その場で可能な対応を積み上げるという、現場での模索の結果であった。そのため、例えば、資料のネット上での利用条件について、開催後、繰り返し所蔵館に確認する必要が生じたり、検討を依頼したりするケースも生じた。今後は、借用段階からインターネット発信等を視野に入れ調整していくことや、記録映像、音声ガイドなどの活用方法の検討なども求められるのではないかな。

二つ目に、ツイッターについては、ツイッターに習熟した館内・館外の展示プロジェクト委員の全面的な協力により、炎上を避けつつ運用することができ、展示広報と反響の把握に大きな役割をはたした。また、このような館の公式ツイッターと、展示内容について具体的に言及する企画用のツイッターを分けて行う方法は有効であった。しかし、展プロだけで十分な運用が出来ない場合も考えられ、SNSの活用のためには、さらに経験の蓄積や組織的対応が必要であろう。

三つ目に、社会的反響とは別に、今回の展示内容についての展示批評とともに、歴博におけるジェンダー視点にたつ研究深化が中長期的課題としてきわめて重要である。展示プロジェクトでは、岡山大学文学部ジェンダー研究プロジェクトとの共同研究会（「性差/ジェンダー」を通史でとらえるということ」2021年3月4日）、基幹研究（2020年度第2回研究会「日本列島社会における産業・労働の展開とジェンダー」2021年3月8日）を行ったほか、2021年度に大阪歴史科学協議会、千葉史学会などでの合評会が予定されているが、博物館とジェンダー、あるいはジェンダー視点に立つ歴史学の一層の進展を図る必要がある。

4. マスコミでの取り上げ

【新聞】

朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、東京新聞、日本経済新聞、千葉日報、東洋経済新聞、教育家庭新聞、しんぶん赤旗、上毛新聞、南日本新聞、高知新聞、北日本新聞、茨城新聞、福島民友、徳島新聞、河北新報、京都新聞、伊勢新聞、東奥日報、産経新聞等、記事数174（2021年3月末）

【雑誌・ミニコミ誌】

月刊ギャラリー、美術の窓、ふれあい毎日、週刊文春、ぐるっと千葉、CasaBRUTUS、女性セブン、AERA、芸術新潮等、54誌（2021年3月末）

【テレビ・ラジオ】

チバテレビ，ケーブルネット296，荻上チキ・Session，アフター6等，9番組

【その他】

ニコニコ美術館ほかウェブ，ブログ掲載多数，202件（2021年3月末）

5. 展示プロジェクト委員

（五十音順 ◎代表，○副代表）

<館外>

池田 忍 千葉大学大学院人文科学研究院
 伊集院葉子 専修大学文学部
 長 志珠絵 神戸大学大学院国際文化科学研究科
 小野沢あかね 立教大学文学部
 久留島典子 東京大学史料編纂所
 小林 緑 元国立音楽大学音楽学部
 下江 健太 鳥取県埋蔵文化財センター
 清家 章 岡山大学大学院社会文化科学研究科
 田中 禎昭 専修大学文学部
 塚田 良道 大正大学文学部
 辻 浩和 川村学園女子大学文学部
 伴瀬 明美 東京大学史料編纂所
 東村 純子 福井大学教育地域科学部
 人見佐知子 近畿大学文芸学部
 廣川 和花 専修大学文学部
 福田 千鶴 九州大学基幹教育院
 松沢 裕作 慶應義塾大学経済学部
 水野 僚子 日本女子大学人間社会学部
 村 和明 東京大学大学院人文社会系研究科
 森下 徹 山口大学教育学部
 柳谷 慶子 東北学院大学文学部
 義江 明子 元帝京大学文学部

<館内>

内田 順子 本館研究部・教授
 ○小島 道裕 本館研究部・教授
 澤田 和人 本館研究部・准教授
 仁藤 敦史 本館研究部・教授
 三上 喜孝 本館研究部・教授
 ◎横山百合子 本館研究部・教授

【新・特集展示】

「海の帝国琉球—八重山・宮古・奄美からみた中世—」

2021年3月16日～5月9日（48日間）

1. 展示趣旨

世界史上の大航海時代より以前，早くも14世紀代から東アジア海域世界では活発な交易がおこなわれていた。それを牽引した琉球は，単なる受動的な中継貿易国家ではなく，諸外国と複雑な外交交渉をおこない，積極的な交易活動を展開した海洋国家であった。その活動過程で，言語も習俗も異なる八重山・宮古や奄美に侵攻し，在地社会

を大きく変化させた。その痕跡は、遺跡や遺物、伝承に残るのみである。本展示では、これまでほとんど注目されてこなかった琉球の帝国的側面に視点を据え、宮古・八重山や奄美といった周辺地域から琉球を捉え直す。

なお、本展示は平成27～29年度国立歴史民俗博物館基盤研究「中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究」（研究代表者：村木二郎）、および平成30～令和3年度科学研究費助成事業基盤研究（A）「琉球帝国からみた東アジア海域世界の流動的様態と国家」JSPS18H03592（研究代表者：村木二郎）の成果公開でもある。

2. 展示構成と主な展示資料（所蔵先を明記していないものは本館蔵）

I 描かれた琉球

琉球国図（沖縄県立博物館・美術館）、オルテリウスアジア図

II 八重山・宮古の時代

1 八重山の集落

フルスト原遺跡出土陶磁器（石垣市教育委員会）、新里村遺跡出土陶磁器（沖縄県立埋蔵文化財センター）

2 宮古の集落

住屋遺跡・ミスズマ遺跡出土陶磁器（宮古島市教育委員会）

III 境界領域としての奄美

1 奄美の集落

手久津久遺跡群中増遺跡出土陶磁器（喜界町教育委員会）、与論城跡出土陶磁器（与論町教育委員会）

2 北からみた奄美

千竈時家処分状（複製）、島津道鑑讓状案（東京大学史料編纂所）

IV 琉球統一と中央集権

1 沖縄本島の集落とグスク

銘苅原遺跡出土陶磁器（那覇市教育委員会）、勝連城跡出土陶磁器（うるま市教育委員会）

2 琉球王権と明の冊封

首里城二階殿地区出土陶磁器（沖縄県立埋蔵文化財センター）、円覚寺殿中鐘（沖縄県立博物館・美術館）、青磁陽刻牡丹文大花瓶

V 那覇港と島々を結ぶ

1 首里王府と那覇港

首里那覇港図屏風（沖縄県立博物館・美術館）、琉球交易港図屏風（複製）

2 唐船口

那覇里主部中書状（東京大学史料編纂所）、渡閩航路図（沖縄県立博物館・美術館）、歴代宝案（法政大学沖縄文化研究所）、渡地村跡出土品（那覇市教育委員会）、冊封使船送迎之図

3 宮古口

琉球往来（東京大学総合図書館）、琉球国三司官書状（東京大学史料編纂所）、宮古島下地の首里大屋子への辞令書（沖縄県立博物館・美術館）、金頭銀茎簪（宮古島市総合博物館）、宮古上布の御絵図衣装（宮古上布保持団体）

4 倭口

那覇里主・沢岬里主書状（東京大学史料編纂所）、伊波普猷『おもろさうし』研究ノート（法政大学沖縄文化研究所）、硫黄鉍石（沖縄県立博物館・美術館）、銘刈子墓碑拓本

VI 中国と日本のはざままで

1 日本の支配と琉球

羽柴秀吉朱印状、中山王尚穆書状

2 東アジア世界の中の近世琉球

康熙帝賜琉球国王尚貞勅諭写（宮内庁書陵部）、明清冊封詔勅目録（東京大学史料編纂所）、琉球使節道中絵巻、江戸山下御門内朝鮮人登城行列、中山伝信録、官刻六諭衍義大意

3. 刊行物

展示図録（A4版 122頁）

展示解説シート（B5版 4頁）

広報用ポスター、チラシ

ワークシート

4. 関連行事

令和3年4月10日 第432回歴博講演会「八重山・宮古・奄美からみた琉球帝国」 村木二郎

5. 成果と課題

館蔵資料を前提とした予算規模の小さい新特集展示であるが、テーマ的には借用資料に依存せざるを得ない。そのため美専車による資料借用は沖縄県立博物館・美術館をハブとした沖縄本島と都内に限定せざるを得ず、やや資料点数が少なかった。アンケートでもその点についてのマイナス評価がまま見られた。なお、石垣島・宮古島・与論島・喜界島の資料については陶磁器片が中心であったため、各機関のご理解をいただきハンドキャリアでの借用を認めてもらった。離島の資料群がこれだけ一堂に会する機会はなく、その点はプラス評価をいただいた。

資料借用に予算を傾注したため、展示室内は既存のケースを並べただけで、壁などの造作はおこなわなかった。しかし、正保琉球国八山島絵図写の原寸大(345.3×635.9cm)床貼写真や行燈ケースの多用、大テーマサインのバナーによって、空隙は目立たなかった。コロナ禍における来館者の安全対策としても、適度な距離間の保持に働いたようである。

展示内容は難解な研究成果の公開であったため、展示パネルやキャプションは極力端的に表現することを心掛けた。来館者の興味・関心に応じた理解の仕方があると思ひ、敢えて踏み込んだ解説は入れなかった。しかしわかりにくかったという感想が多かったことは認めざるを得ない。また手持シートの裏面に島々の地図を付けたのだが、展示室に全体地図がないのでわかりにくいという感想が多かったのは、残念ながらこちらの仕掛けが伝わらなかったためであり、反省している。

一方、これまでにない視点での刺激的な展示であったという意見も多かった。歴博らしさをそのあたりに求めている来館者、研究者の声には、共同研究に根差した学術展示を旨とするうえで大いに励まされた。展示の準備過程において沖縄本島でシンポジウムをした際、「琉球帝国」というキーワードがどのように捉えられるか甚だ不安であった。しかしそういう歴史の見方があることに沖縄の方々は賛意を示してくれた。慎重かつ謙虚であることは当然であるが、妙な付度をして研究成果を遠慮して提示する必要はなく、真摯に語り掛けることで研究内容の真の意図を理解してくれる方は多い。学術展示、歴史展示に対する社会の期待は確実に高まっていると実感した次第である。

体験コーナーは、コロナ禍で様々な規制がかかったため、スマートフォンでできるARプログラムを5つ用意した。いずれも展示内容をより深く理解するためのものである。アプリをインストールするなどややハードルが高かったため、必ずしも大勢の来館者が体験したわけではなかったが、会期中から実施率が急激に上がったことが確認できている。展示室のWi-Fi環境も整備されてきており、工夫次第でさまざまな可能性がある有効な手段と感じた。なお、広報サービス室活用担当職員の多大なるご苦勞のおかげで実現できたことを、記して感謝申し上げる。

本展示は科研費による調査がベースとなっているため、展プロ以外にも多くの方々が関わって展示チームを構成した。学際的な共同研究はよそでもできるが、展示という表現媒体は歴博にしかなくそれが大きな魅力だ、として誠心誠意協力してくれる方が多い。大学共同利用機関としての歴博の存在意義を改めて感じる事ができた。

6. マスコミでの取り上げ

【新聞】

朝日新聞、毎日新聞、日本経済新聞、東京新聞、琉球新報、沖縄タイムス、山形新聞、秋田魁新報、下野新聞、信濃毎日新聞、南日本新聞、中国新聞、長崎新聞、佐賀新聞

【雑誌・ミニコミ誌】

房総ファミリア新聞、歴史人、スペースマガジン

【テレビ・ラジオ】

NHK Eテレ「日曜美術館アートシーン」、チバテレビ「newsチバ」、ケーブルネット296

【その他】

ウェブ、ブログ掲載

7. 展示プロジェクト委員

(◎は代表、○は副代表)

〔館外〕 新垣 力 沖縄県教育庁文化財課 主任専門員
池田 榮史 琉球大学国際地域創造学部 教授

池谷 初恵	伊豆の国市教育委員会 文化財調査員
岩元 康成	始良市教育委員会 主事
小野 正敏	国立歴史民俗博物館 名誉教授
久貝 弥嗣	宮古島市教育委員会 係長
黒嶋 敏	東京大学史料編纂所 准教授
小出麻友美	千葉県立中央博物館 研究員
佐々木健策	小田原市文化財課 係長
山本 正昭	沖縄県立博物館・美術館 主任学芸員
[館内] ○荒木 和憲	本館研究部・准教授
齋藤 努	本館研究部・教授
田中 大喜	本館研究部・准教授
松田 睦彦	本館研究部・准教授
◎村木 二郎	本館研究部・准教授

[くらしの植物苑特別企画]

[季節の伝統植物]

春：伝統の桜草	2020年4月14日（火）～5月6日（日）中止
夏：伝統の朝顔	2020年7月28日（火）～9月6日（日）（37日間）
秋：伝統の古典菊	2020年10月27日（火）～11月29日（日）（30日間）
冬：冬の華・サザンカ	2020年12月1日（火）～2021年1月31日（日）（47日間）

1. 展示趣旨

江戸時代に隆盛をきわめた園芸文化は、日本独自の感性と高度な技術により、多種類の植物群にわたっておびただしい品種群を作り出してきた。それらの多くは明治時代以降の西洋園芸の急速な普及によって失われ、かつての園芸技術も消滅しようとしている。この特別企画は、絶滅に瀕している古典園芸植物の系統の探索と維持、生物学的な基礎研究と歴史的な基礎研究の融合を行い、その成果を展示として公開するものである。

2. 展示構成と主な展示品

特別企画「季節の伝統植物」では、四季に関わる4つの園芸植物を展示した。

春：「伝統の桜草」とは、江戸時代中期以降、園芸家によって野生種の中から変わった花が探し出され、多くの品種が生み出されてきた一連の桜草をさす。今年度は、「桜草の栽培史—江戸中期から幕末まで—」というテーマで企画を立てていたが、新型コロナウイルスの影響で中止となった。具体的な内容は、江戸中期から様々な園芸品種が出現し、連がつくられて品評会が開催されたことによって品種が増えて、桜草文化が形成・発展した様子を展示する予定であった。

夏：「伝統の朝顔」とは、江戸時代以降になると、文化・文政・天保期、嘉永・安政期、明治・大正期など、繰り返す朝顔ブームが訪れ、そのたびに葉と花の多様な変化や組み合わせを楽しむために作り出されてきた変化朝顔を意味する。今年度は、文化・文政期頃（1810年代～1830年代）に武士や庶民の間でおこった「朝顔の第一次ブーム」をテーマとし、当時の系統が現在にも残っていることを紹介した。第一次ブームにおいて楽しまれていたのは、種のできる正木系統のわずかな変異がほとんどである。その様子を図譜と現物展示を対比させることによって示した。また、当時の人々の朝顔に対する知識について、現代の遺伝学の面から解説した。

秋：「伝統の古典菊」とは、筆先のような花卉をもつ「嵯峨菊」や花卉の垂れ下がった「伊勢菊」、花卉のまばらな「肥後菊」、花卉が咲き始めてから変化していく「江戸菊」のことである。これらに花の中心が盛り上がりつつ咲く丁子菊を加えた伝統的な中輪種は「古典菊」と呼ばれている。今回は、「菊の番付」をテーマとし、江戸時代と明治時代における菊の番付を展示した。また、近代における八戸と団子坂の番付についてそれぞれ解説した。

冬：サザンカは、自生種に近い「サザンカ群」、獅子頭の実生またはその後代と考えられている「カンツバキ群」、サザンカとツバキの間で自然にできた雑種またはその後代と考えられている「ハルサザンカ群」の3グループに大別されるが、花はグループごとに10月中頃から翌年2月にかけて上記の順に咲いていく。今年度の「冬の華・

「サザンカ」では、「サザンカ今後の展望」をテーマとし、2001年より当苑で展示してきた20年を振り返りつつ、遺伝資源としてのサザンカの園芸品種や、サザンカの文化史について紹介したが、コロナの影響で関連する歴博講演会が中止となった。

3. 主な行事

特別企画「季節の伝統植物」に関連した観察会

2020年4月25日（土）中止：第253回「桜草の栽培史—江戸中期から幕末まで—」水田大輝

8月22日（土）中止：第257回「朝顔の第一次ブーム」仁田坂英二

11月28日（土）：第260回「菊の番付」平野恵

12月19日（土）：第261回「体験講座 桜草を植え替えてみよう」山村聡

特別企画「季節の伝統植物」に関連した講演会

2020年12月12日（土）中止：第429回「サザンカ今後の展望」箱田直紀

苗の有償頒布〔桜草：中止，朝顔：中止，菊：中止，サザンカ：12月1日（火）〕

4. 成果と課題

「伝統の桜草」は、開催中止によって翌年度に企画を持ち越すことになった。

「伝統の朝顔」は、開催初日の解説会を開催できず、広報活動も積極的にできなかった。その割に来苑者数は例年と比べてあまり減らなかった。その原因は、コロナの影響で外出が自粛されている中で、屋外の展示は比較的安心して見学できたからだと考えている。ただし、解説会と観察会が実施できなかったことで、「朝顔の第一次ブーム」に次ぐ第二次ブーム、第三次ブームの展示が途切れてしまっている。

「伝統の古典菊」の来苑者数もあまり減らなかった。江戸時代から明治時代にかけて人気を博した品種は、現在残っていないことも多いので、実物展示との関わりでイメージしにくかった部分はあるかと思う。

「冬の華・サザンカ」は2001年に特別企画を始めた。このため、20周年記念として第424回歴博講演会「サザンカ今後の展望」（講師：箱田直紀，恵泉女学園大学名誉教授）を予定していたが、これもコロナの影響で中止となった。これについては2021年12月に延期する予定である。記念イベントが延期になったことには打撃が大きいですが、何とか回復させていきたいと考えている。

5. マスコミでの取り上げ

【新聞】

朝日新聞，読売新聞，東京新聞，日本経済新聞，千葉日報

【雑誌・ミニコミ誌】

園芸ガイド，趣味の園芸，季刊PreFla，月刊美術，日経サイエンス，月刊ぐるっと千葉，ランドスケープデザイン，子供の科学，

ならしの朝日，北総よみうり，ふれあい毎日，地域新聞

【テレビ／ラジオ】

テレビ朝日 [グッド！モーニング]，ケーブルネット296

6. 展示プロジェクト（◎：代表，○副代表）

辻 誠一郎 東京大学名誉教授

仁田坂英二 九州大学大学院理学研究院

箱田 直紀 恵泉女学園大学名誉教授

平野 恵 台東区立中央図書館

岩淵 令治 学習院女子大学

水田 大輝 日本大学生物資源科学部

◎青木 隆浩 本館研究部・准教授

日高 薫 本館研究部・教授

○澤田 和人 本館研究部・准教授

川村 清志 本館研究部・准教授

山村 聡 本館管理部・専門職員

[特集展示]

第1展示室「庫外正倉院文書と盤龍鏡—井上辰雄氏蒐集資料展」

2020年10月13日（火）～11月15日（日）

1. 展示趣旨

2019年に故井上辰雄筑波大学名誉教授の遺族より寄贈を受けた庫外正倉院文書および盤龍鏡とその関連資料を展示し、広く社会および学界に紹介する。

2. 展示資料

H-1922 葦浦継手手実（庫外正倉院文書）	1 幅	2019年寄贈品
H-1587-2 答他虫麻呂手実（庫外正倉院文書）	1 通	
H-312-1-43-1 正倉院古文書正集第43巻複製	1 巻	薩摩国正税帳
H-312-2-21-1 正倉院古文書統修第21巻複製	1 巻	葦浦継手月借錢解
H-312-5-1-4-1 正倉院古文書統々修第1帙第4巻複製	1 巻	
A-761 盤龍鏡（漢鏡）	1 面	2019年寄贈品
A-473 広峯15号墳出土景初四年銘盤龍鏡	1 面	漢鏡を模倣した魏鏡
当館井上文庫本 井上辰雄『正税帳の研究』塙書房	1 冊	

3. 関連行事

解説会（新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止）

4. 刊行物

広報用ポスター・チラシ（解説シートを兼ねる）

5. 成果と問題点

当館では開設時より庫外正倉院文書の蒐集を進めているが、この度、個人で所蔵していた研究者の御遺族より寄贈を受けたことにより、歴博所蔵の庫外正倉院文書は7点(天平9年6月25日山辺諸公手実を加えれば8点)となった。今回の特集展示により、歴博に新たな庫外正倉院文書が加わったことが広く知られ、また庫外正倉院文書そのものについて、また関連資料として展示した正倉院文書複製事業についての理解も深められた。ただしやはり第一室の特集展示スペースは狭く、なんらかの特筆すべき点がないと、特集展示として成り立たせることが難しいとも感じた。

6. マスコミの取り上げ

【新聞】

朝日新聞、東京新聞、千葉日報、中外日報、新美術新聞

【雑誌・ミニコミ誌】

月刊ギャラリー、ぐるっと千葉

【テレビ・ラジオ】

チバテレビ

【その他】

ウェブ、ブログ掲載

7. 展示プロジェクト

- ◎小倉 慈司 本館研究部・准教授
- 上野 祥史 本館研究部・准教授
- 仁藤 敦史 本館研究部・教授
- 三上 喜孝 本館研究部・教授

第3展示室「大津絵と江戸の出版」

2020年8月4日（火）～9月6日（日）

1. 展示趣旨

江戸時代、大津の追分周辺で売られていた肉筆の民衆絵画である大津絵は、木版や合羽摺の技法なども併用して大量生産され、大津土産として全国に広く知られるものとなった。江戸末期には「大津絵十種」といれるような定番の画題が定着し、歌舞伎や戯作など、江戸の大衆文化にも題材を提供するようになる。とくに錦絵の戯画のモチーフとして好まれ、嘉永6年（1853）の歌川国芳の「浮世又平名画奇特」のようなヒット作も生み出し、風刺画を示唆する機能も有するようになった。

本特集展示では、館蔵の大津絵12点のうち11点を紹介するとともに、江戸末期から明治初期にかけて、大津絵をモチーフに取り入れた錦絵など併せて展示し、江戸末期における大津絵イメージの広がりについて考察する。

2. おもな展示資料

H-21	大津絵 12幅中11幅
H-1242-6-253-1	東海道名所図会・巻一
F-320-283	歌川国貞画・大津絵の鬼
F-320-4-73	歌川国芳画・浮世又平名画奇特
H-22-2-158-9	楊洲周延画・千代田の大奥 初午

3. 関連行事

解説会（新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止）

4. 刊行物

解説シート、広報用ポスター・チラシ

5. 成果と問題点

収蔵以来、館内でほとんど活用されることがなかった大津絵を、1点を除き（この1点は他館に貸し出し中）まとまって展示することができた。また、大津絵だけではなく、それに関連する江戸末期の風刺画等の錦絵を合わせて展示することで、大津絵の画題が江戸の大衆文化の中にどのように浸透し、変容していくのかを具体的に示すことができた。

「江戸の出版」と題したものの、館蔵資料の限界と準備不足もあって、錦絵の画題に大きな影響を与えた戯作や演劇など江戸の文学における大津絵主題の取り上げについては踏み込めなかった。

6. マスコミの取り上げ

【新聞】

朝日新聞、東京新聞、千葉日報、新美術新聞

【雑誌・ミニコミ誌】

北総よみうり、地域新聞、ぐるっと千葉、月刊美術、プレイボーイ、スペースマガジン

【テレビ・ラジオ】

ケーブルネット296

【その他】

ウェブ、ブログ掲載

7. 展示プロジェクト

◎大久保純一 本館研究部・教授

○関沢まゆみ 本館研究部・教授

第3展示室「海を渡った漆器Ⅲ—輸出漆器の技法」

2020年12月15日（火）～2021年2月7日（日）

1. 展示趣旨

16世紀後半以降、大量の漆器が日本の特産品として海外に向けて輸出された。西洋人の注文によって製作されたこれらの漆器は、西洋に由来する形態の家具調度品に、日本独特の蒔絵や螺鈿の装飾をほどこしたものである。艶やかに光る黒い塗装面に、重厚な黄金の輝きが映える蒔絵漆器、またエキゾチックな煌めきを放つ螺鈿漆器は、ヨーロッパの富裕層のあいだで評判となり、日本という東方の未知の国を象徴する物品として愛好された。

本展示では、輸出漆器に用いられた技法にとくに焦点をあて、蒔絵と螺鈿という伝統的な装飾技術が文化交流に果たした効果について考える。また、中国から西洋向けに輸出された漆器をあわせて展示し、アジアにおけるグローバル商品としての漆器輸出の実態を紹介する。

2. おもな展示資料

- H-1618-2 山水蒔絵小箆筒, H-1194-1草花風景蒔絵葉箆筒
 - H-1618-9 故事人物蒔絵螺鈿瓶子 一対, H-1194-5 楼閣山水蒔絵キャスケット
 - H-1738 山水花鳥螺鈿化粧箆筒, H-995-11 朝顔花鳥螺鈿ゲーム箱
 - H-786-5 サンクト・ペテルブルク風景図蒔絵ブラーク
 - H-786-11 ケステイウスのピラミッド螺鈿蒔絵ブラーク
 - H-1888 ガイウス・ケステイウスのピラミッド（銅版画）
 - H-1618-12 楼閣人物唐草描金ゲーム箱（中国製輸出漆器）
 - H-1618-15 楼閣人物描金衝立（中国製輸出漆器）
- など約30点

3. 関連行事

解説会（新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止）

4. 刊行物

解説シート, 広報用ポスター・チラシ

5. 成果と問題点

通常の総合展示では展示されることがない館蔵輸出漆器資料について公開の機会を作り、第3展示室「国際社会のなかの近世日本」の展示内容を補足し充実させることができた。輸出漆器をテーマとした特集展示は、今回が3度目であるが、これまでとは異なる視点で展示を構成した。特に大型の中国製輸出漆器「楼閣人物描金衝立」は、新収蔵品展以来2度目の展示であり、技術的な違いや、日本製漆器輸出の背景を示すことができた。来館者も興味をもって観覧し、歴博の収蔵資料の豊かさを実感していた。

6. マスコミの取り上げ

【新聞】

朝日新聞, 日本経済新聞, 東京新聞, 千葉日報

【雑誌・ミニコミ誌】

ふれあい毎日, ぐるっと千葉

【テレビ・ラジオ】

CATV296

【その他】

ウェブ, ブログ掲載

7. 展示プロジェクト

©日高 薫 本館研究部・教授

第3展示室「桜の意匠」

2021年3月16日（火）～4月11日（日）

1. 展示趣旨

桜は日本で古くから親しまれてきた花である。詩歌で単に「花」といえば、奈良時代には中国の文化にならって梅を指していたのが、平安時代には桜に転じたことは、よく知られている。日本には10種もしくは11種の野生種の桜が自生しており、そのわずかな種類の野生種から200品種以上の栽培品種を生み出し、それは世界でも圧倒的に多い品種数を誇っている。しかも、基本的には花の鑑賞を目的として、品種が作出されてきた。

本館の建つ城址公園は、春には約50品種、1,000本以上の桜が咲き、桜の名所として市民に親しまれている。また、開館30周年を迎えた平成25年以来、本館は「歴博夜桜鑑賞の夕べ」を開催し、桜鑑賞の機会を市民に積極的に提供してきていいる。こうした活動と連動し、本特集展示では、園芸、意匠、花見といった視点から、近世における人と桜との関りを見ていく。園芸では、園芸書や図譜などにより、どのような品種の桜を鑑賞していたのかを示す。意匠では、桜をモチーフとした美術工芸品から、桜にまつわるイメージを探る。花見では、錦絵などにより、江戸における桜の花見の名所を紹介する。

2. おもな展示資料

増補地錦抄	H-1559-12
怡顔斎桜品	H-1559-21
四季桜模様小袖	H-35-247
花筏模様振袖	H-35-207
義経千本桜	H-22-67
新板狂歌江戸花見双六	H-1559-20
武州小金井堤満花之図	H-22-158

3. 関連行事

解説会（新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止）

4. 刊行物

解説シート、広報用ポスター・チラシ

5. 成果と問題点

花見の風習が庶民にまで広まったのは、江戸時代になってからといわれている。現代と同じように、江戸の人々も花見を楽しんでいたが、現代とは違った点も色々あった。本展を通して、現代とはまた異なる江戸の人々が実際に見ていた桜の品種や、楽しみ方、抱いていたイメージについて提示することができた。本来ならば、城址公園の桜と連動させた内容を盛り込む予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、実際の花とつなぐことができなかつたのが残念である。

6. マスコミの取り上げ

【新聞】

東京新聞、中外日報、日本教育新聞

【雑誌・ミニコミ誌】

地域新聞、房総ファミリア新聞

【テレビ・ラジオ】

チバテレビ

【その他】

ウェブ、ブログ掲載

7. 展示プロジェクト

◎澤田 和人 本館研究部・准教授

大久保純一 本館研究部・教授

日高 薫 本館研究部・教授

第4展示室「石鹸・化粧品の近現代史」

2019年12月3日（火）～2020年5月6日（水）

→新型コロナウイルス感染拡大防止にかかる臨時休館により、2月28日（金）～6月29日（月）まで閉室。その後、6月30日（火）～8月30日（日）に再開

1. 展示趣旨

化粧や衛生の流行は、衣服ほど短期間で変化するものではない。しかし、10～20年の単位で振り返ると、大きく変化していて、日常生活の常識観に少なからぬ影響を与えている。

明治時代に入ってから化粧品の工業製品化が進んでいったが、商品の中心はスキンケア商品、石鹸、歯磨、香油であった。また、明治初期から欧米風の化粧法が紹介されていたが、洋装に対する抵抗感から、とくに口紅やアイシャドウのような口や目を際立たせる商品は、1930年頃まで普及しなかった。1930～35年あたりにメイクが流行り、一時的に化粧品の生産量が増えたものの、それ以降は原料不足のために生産自体が政府の統制におかれた。戦後にその統制は少しずつ解除されていったが、長らく贅沢品とみなされ、日常的に使える状況ではない時代が続いた。化粧品業界が本格的に復興したのは、高額だった物品税が下げられ、口紅のキャンペーンが始まった1960年代中頃以降のことである。そして、1980年代に機能性を重視した商品が次々と開発され、1990年代にはメイク専門雑誌が刊行されるに至るまで、化粧品が一般に普及した。

髪の毛を毎日洗うようになったのは「朝シャン」という言葉が流行った1987年以降のことである。もともと石鹸やシャンプーはアルカリ性であり、肌や髪を傷めやすいものであった。米ぬかや小麦粉を主原料とする洗い粉が使われていたのは、石鹸の品質があまりよくなかったからであった。その上、第二次世界大戦が始まると、物資不足のために品質が低下して顔用の石鹸が製造できなくなり、浴用石鹸や洗濯石鹸も高額の物品税が課せられて、売り上げが低迷した。1950年代後半には中性のシャンプーが開発され、その後オイルを含有させた商品やリンスが開発されるものの、洗髪頻度は週1回程度であった。各家庭に内風呂が普及すると、石鹸は洗すぎない液体タイプに変わり、シャンプーはツヤを残すものが開発された。それでも弱酸性の髪を傷めにくいシャンプーが家庭に普及した歴史は案外浅く、2000年代に入ってからのことである。

そこで、本展示では日本の美容観や衛生観に影響を与えてきた石鹸と化粧品の歴史を商品と広告類を使って紹介する。2016年秋の企画展示「身体をめぐる商品史」よりもできるだけ古い時代に重点をおくことと、幅広い企業の資料を展示することにした。

なお、展示期間中に2回の展示替えをおこなった。第Ⅰ期は12月3日（火）～1月26日（日）、第Ⅱ期は1月28日（火）～3月22日（日）、第Ⅲ期は6月30日（火）～8月30日（水）に開催した。第Ⅰ期は明治・大正期、第Ⅱ期は昭和戦前期、第Ⅲ期は戦後の資料を中心に展示をする。

2. おもな展示資料

第Ⅰ期

ライオン洗石鹸（小林富次郎商店、現ライオン、明治45年）

カテイ石鹸（中山太陽堂、現クラブコスメチックス、昭和20年代）

クラブピシン石鹸セット紙箱（中山太陽堂、現クラブコスメチックス、昭和初期）

資生堂石鹸紙箱 3個入（資生堂、大正11年）

花王石鹸紙箱（花王石鹸株式会社長瀬商会、現花王、昭和6年）

花王シャンプー（花王石鹸株式会社長瀬商会、現花王、昭和7年）

花王シャンプー ポスター（花王石鹸株式会社長瀬商会、現花王、昭和7年）

オリジナルバニシングクリーム ポスター（安藤井筒堂、現オリジナル、大正～昭和初期）

白絹のやうな・・・やわ肌をつくる（鐘淵紡績、現カネボウ化粧品、昭和11年）

御料 御園化粧品 リーフレット (伊東胡蝶園, 後のパピリオ, 昭和初期)
 資生堂グラフ45号 (資生堂, 昭和12年)
 マックスファクター 三越売り出しリーフレット (マックスファクター, 昭和初期)
 御園白粉 (伊東胡蝶園, 後のパピリオ, 明治37年)
 クラブ洗粉 (中山太陽堂, 現クラブコスメチックス, 昭和初期)
 クラブ美身クリーム (中山太陽堂, 現クラブコスメチックス, 明治44年)
 レートクレーム (平尾賛平商店, 後のレート, 明治42年)
 レートメリー (平尾賛平商店, 後のレート, 大正7年)
 ウテナバニシングクリーム (雪印) (久保政吉商店, 現ウテナ, 昭和2年)
 フローリン (資生堂, 昭和初期)
 七色粉白粉 (資生堂, 昭和初期)
 マスターバニシングクリーム (尚美堂, 大正~昭和初期)
 ヘチマコロソ (天野源七商店, 現ヘチマコロソ, 大正4年)
 薬用ライオン歯磨 (小林富次郎商店, 現ライオン, 明治29年)
 ライオンコドモハミガキ (小林商店, 現ライオン, 昭和12年)
 婦人と口腔衛生 (小林商店, 現ライオン, 大正12年)
 資生堂クリーム歯磨 (資生堂, 大正~昭和初期)

第II期

ミツワ石鹸 (丸見屋商店, 後のミツワ石鹸, 昭和20年代)
 カネボウ絹石鹸 (鐘淵化学工業, 現カネボウ化粧品, 昭和20年代)
 牛乳石鹸 (牛乳石鹸共進社, 昭和20年代)
 資生堂シャンプー (資生堂, 昭和10年代)
 メヌマボマード ポスター (井田京栄堂, 昭和初期)
 ポスター原画 アイデアルクリーム (高橋東洋堂, 現コンテス, 昭和10年代)
 丸見屋商店発売品目録 (丸見屋商店, 後のミツワ石鹸, 昭和4年頃)
 リーフレット ホルモンの話 (中山太陽堂, 現クラブコスメチックス, 昭和10年代)
 女性美手帖 (平尾賛平商店, 後のレート, 昭和13年)
 化粧するなら (桃谷順天館, 昭和初期)
 花椿 1巻2号 (資生堂, 昭和12年)
 クラブ洗粉 (中山太陽堂, 現クラブコスメチックス, 昭和10年代)
 クラブ美身クリーム (中山太陽堂, 現クラブコスメチックス, 昭和10年代)
 レートフード (平尾賛平商店, 後のレート, 大正4年)
 にきびとり美顔水 (桃谷順天館, 明治20年)
 明色粉白粉 (桃谷順天館, 昭和初期)
 ウテナ ハイゼニッククリーム (月印) (久保政吉商店, 現ウテナ, 昭和3年)
 御園チタニウム白粉 (伊東胡蝶園, 後のパピリオ, 昭和10年代)
 アイデア液状コールドクリーム (高橋東洋堂, 現コンテス, 昭和初期)
 アイデア粉白粉 肌色 (高橋東洋堂, 現コンテス, 昭和10年代)
 資生堂バニシングクリーム (資生堂, 昭和初期)
 マスター水白粉 (尚美堂, 大正~昭和初期)
 ヘチマコロソ化粧水 (天野源七商店, 現ヘチマコロソ, 昭和10年代)
 若柳粉白粉 (柳屋本店, 昭和初期)
 柳屋洋髪香油 (柳屋本店, 昭和初期)
 キスミーほほ紅 (伊勢半, 昭和初期か?)
 花王バニシングクリーム (花王, 昭和20年代)
 コーサー粉白粉 (小林コーサー, 現コーサー, 昭和23年)
 コーサー コールドクリーム (小林コーサー, 現コーサー, 昭和27年)
 ライオン煉歯磨 (小林富次郎商店, 現ライオン, 明治36年)
 歯をきれいにするおはなし (小林富次郎商店, 現ライオン, 昭和2年)
 ライオン歯刷毛 一号形 (小林商店, 現ライオン, 昭和2年)

資生堂歯刷毛（資生堂，昭和10年代後半）

第Ⅲ期

クラブ 美の素石鹸（中山太陽堂，現クラブコスメチックス，昭和初期）
 ミツワ トイレットソープ（丸見屋商店，後のミツワ石鹸，昭和初期）
 資生堂石鹸ブリキ缶（資生堂，年代不明）
 花王フェザーシャンプー（花王，昭和30年）
 バスボンのうた（資生堂，昭和51年）
 マスター襟白粉 ポスター（尚美堂，昭和初期）
 ヘチマクリーム ポスター（天野源七商店，現ヘチマコロン，大正～昭和初期）
 口紅のコンパクト hi-society ポスター（マックスファクター，昭和35年）
 パピリオ包装紙（パピリオ，昭和40年代か？）
 花椿 復刊1号（資生堂，昭和25年）
 ポーラ美容新聞 第19号（ポーラ化成工業，現ポーラ，昭和28年）
 QUEEN No.14（鐘淵化学工業，現カネボウ化粧品，昭和31年）
 カトレア 第1巻第5号（小林コーサー，現コーサー，昭和33年）
 BELL No.95（鐘淵紡績，現カネボウ化粧品，昭和39年）
 EXCEL 創刊号（ポーラ化粧品本舗，現ポーラ，昭和43年）
 シャーベットトーン広告（資生堂，昭和37年）
 ジェミネス・バイ・マックスファクター（マックスファクター，昭和50年）
 レート粉白粉 肌色（平尾賛平商店，後のレート，昭和初期）
 クラブ白粉錠（中山太陽堂，現クラブコスメチックス，大正時代）
 薬用クラブ乳液（中山太陽堂，現クラブコスメチックス，昭和10年代）
 クラブ ラブ乳液（中山太陽堂，現クラブコスメチックス，昭和33年）
 パピリオ Aクリーム（パピリオ，昭和20年代）
 パピリオ粉白粉 肌色二号（パピリオ，昭和24年）
 ウテナ粉白粉（久保政吉商店，現ウテナ，昭和初期）
 オリジナルクリーム（安藤井筒堂，現オリジナル，大正～昭和初期）
 マスターバニシングクリーム（尚美堂，昭和初期）
 マスターコールドクリーム（阪本有機工業・中央油脂化学，昭和20年代か？）
 明色エリ白粉（桃谷順天館，昭和10年代）
 アイデアバニシングクリーム（高橋東洋堂，現コンテス，昭和初期）
 アイデア香水 ヘリオトロープ（高橋東洋堂，現コンテス，昭和20年代か？）
 ソワドレーヌ エンリッチクリーム（鐘淵紡績，現カネボウ化粧品，昭和30年代後半～40年代前半）
 ラボンヌ コールドクリーム（小林コーサー，現コーサー，昭和32年）
 コーサー カラーケーキ（小林コーサー，現コーサー，昭和37年）
 ジュジュ アストリンゼント オレンジローション（寿化学，現ジュジュ化粧品，昭和20年代中頃～30年代中頃）
 ジュジュ リキッドクリーム（寿化学，現ジュジュ化粧品，昭和20年代中頃～30年代中頃）
 キスミーファンデ リキッドファンデーション（伊勢半，昭和30年代か？）
 資生堂イーゼルペイント（資生堂絵具工業，昭和30年代か？）
 スペシャル ホネアンドレモン（資生堂，昭和38年）
 ライオン潤製歯磨（小林商店，現ライオン，昭和初期）
 美容と健康（小林商店，現ライオン，昭和初期）
 クラブ粉歯磨（中山太陽堂，現クラブコスメチックス，昭和20～30年代）

3. 関連行事

・展示解説会

日時：2019年12月3日（火）13時00分～

・ギャラリートーク

日時：2020年2月11日（土）13時30分～

4. 刊行物

解説シート, 広報用ポスター・チラシ

5. 成果と問題点

本特集展示は、開催前からSNSで数多く取り上げられ、開催後もツイッターでの人気が高かった。SNSへの投稿によると、人気のおもな要因は、展示のタイトルをシンプルにしたことや、写真撮影可にしたことでSNSでの見栄えが良くなったこと、大量生産化以前における石鹸・化粧品・歯磨業界の高度なデザイン力を生かしたパッケージや広告とそのレトロな雰囲気に関心をもつ人が多かったこと、ツイッターによる情報量の多さなどが考えられる。また、近代には道路が舗装されていなかったため、油性のクリームは砂ぼこりが付着するため、家の中でしかあまり使われていなかったことや、内風呂が普及する1960年代後半までの日本では入浴回数が少なかったことなどの解説は、現在の日常生活では気づきにくいけれど、身近な歴史でもあるので、来館者にとっては興味深かったようである。

有力なマスコミからの取材もあった。読売新聞では、文化欄での特集記事を掲載していただいた。その他、朝日新聞の「天声人語」やファッション雑誌『VOGUE』でも取り上げられる話があったが、新型コロナウイルスによる閉館により、実現していない。

2月28日（金）～6月29日（月）までは、新型コロナウイルスの影響により、第Ⅱ期の会期が縮小され、第Ⅲ期の開催も見送られた。その代わりに、第Ⅲ期の展示は、6月30日（火）～8月30日（日）にあらためて開催された。第Ⅲ期の展示は、第二次世界大戦前後から戦後にかけての資料を中心に構成した。

問題点は、今回展示した社名や商品名の認知度が、社名変更や倒産、生産中止などによって必ずしも高くはないので、それらを展示した意図が来館者におそらく十分に理解していただけなかったことである。とくに業界史については、用語が複雑なことや浮き沈みが大きいことなどがあって、どこまで理解していただけたのか疑問を抱いている。

6. マスコミの取り上げ

【新聞】

読売新聞, 千葉日報

【雑誌・ミニコミ誌】

北総よみうり, ぐるっと千葉, 月刊ギャラリー, スペースマガジン

【テレビ・ラジオ】

ケーブルネット296

【その他】

ウェブ, ブログ掲載

7. 展示プロジェクト

◎青木 隆浩 本館研究部・准教授

第4展示室「日本の食の風景—「そとたべ」の伝統—」

2020年9月15日（火）～11月29日（日）

1. 展示趣旨

日本の現在の食文化を形づくってきた歴史的な大きな契機としては、中世の禅宗寺院の料理からの影響が大きいことが知られている。貴族、武家、有力商人が集住した室町時代の京都では独自の文化が醸成され、そうした中で、いわゆる本膳料理の形式がととのえられていった。それが日本料理の基本を形成した。その一方で、江戸時代の町方では一般の町人たちは蕎麦や寿司、天ぷら、うなぎなどの屋台の店を愛用していたことも知られている。また、旅先や寺社参詣では茶店で楽しむ団子や餅がつきものだった。農村では、田植えの時にヒルマモチと呼ばれる女性が運んでくる、朴葉飯などの田植え食が伝承されていた。ここには本膳料理とか老舗の料理などの格式ある

食とは別の、もう一つの日本の食の伝統がある。現在にも伝承されている外でちょっと食べる「そとたべ」の民俗からは、遊び・行事の日のそとたべと仕事・労働の日のそとたべとの両方があることがわかる。

今回の特集展示では、このような「そとたべ」の日本の食の歴史と民俗に注目して、外で食べることの意味について、あらためて考えてみる。

2. おもな展示資料

- H-680 四条河原納涼図屏風
- H-22-2-86 花見の戯れ
- H1368 江戸高名会亭尽（山谷八百善、白山傾城か窪、他）
- H-715-2 新版御府内流行名物案内双六
- H-22-1-5-34 歌川国貞画・市村羽左衛門の下男新作と坂東しうかの是齋娘おつゆ
- 個人蔵 三代歌川豊国画・八代目市川団十郎の南与兵衛
- 個人蔵 三代歌川豊国画・冬の宿嘉例の寿々はき
- H-61-4-20 花見提重（伊能家資料）
- F-133-45 チゲ（漁業用弁当箱）
- H-1902 おでん屋呑喜関係資料（写真額、色紙、芳名録、他）
- 民俗写真資料（芳賀ライブラリー提供） 花見、屋台、ひな祭りの河原での飲食、花田植えの昼飯（ひるま、朴葉飯）、盆の餓鬼供養の河原での飲食、奄美の一重一ピン、他

3. 関連行事

解説会（新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止）

4. 刊行物

解説小冊子、広報用ポスター・チラシ

5. 成果と問題点

「そとたべ」というのは代表者の造語であるが、家の中（屋根のあるところ）で食べる「うちたべ」に対比させて、屋外（屋根のない自然の中）で食べるのを「そとたべ」として区別したものである。「そとたべ」には大きく分けて弁当などの携行食と屋台などで出される提供食とその2つが含まれる。花見の弁当や祭りの屋台などは江戸から継承されてきているが、あらためて江戸時代にさかのぼって、1. 江戸の庶民の「そとたべ」の風景、2. 四季の風景に描かれた「そとたべ」、3. 川原で食べる、4. 仕事と「そとたべ」、5. 先祖と食べる、6. 屋台から店へおでん屋「呑喜」一、の構成とした。展示では江戸の町人たちが好んだ蕎麦や寿司、天ぷらの屋台から、花見の重箱のごちそう、農山漁村の仕事での弁当、田植え食などさまざまな「そとたべ」を館蔵資料と写真パネルや映像などで紹介した。それら、屋台系と弁当系の歴史と民俗について整理してみたところ、「そとたべ」には、行楽の楽しみという意味だけでなく、川原や浜辺、墓での「そとたべ」の民俗によく表れているように、自分が食べるというだけではなく、周りの目には見えないもの、自然界の霊的なものたちにも「ほかい」といって少しずつ食べ物を分けることが大切だという感覚があったことが注目された。屋外での飲食を「そとたべ」と呼び、屋内での「うちたべ」と呼んで、その対比枠でとらえてみることにより、食の基本としての生者の食とは異なる死者や霊的なものたちの食という日本の食文化の伝承世界について示すことができた。

今回は、近世美術史と民俗学の学際協業を試みたが、この「食の歴史と民俗」というテーマはさらに広い学際協業によって大きく展開できるテーマではないかと考えられる。

6. マスコミの取り上げ

【新聞】

朝日新聞、毎日新聞、東京新聞、千葉日報、下野新聞、信濃毎日新聞、新美術新聞、愛媛新聞、高知新聞

【雑誌・ミニコミ誌】

ふれあい毎日、房総ファミリア新聞、ぐるっと千葉、週刊文春、日経サイエンス、アミーカ、東京人、スペースマガジン

【テレビ・ラジオ】

チバテレビ「newsチバ」、静岡第一テレビ「news every. しずおか」、ケーブルネット296

【その他】

ウェブ、ブログ掲載

7. 展示プロジェクト

◎関沢まゆみ 本館研究部・教授

○大久保純一 本館研究部・教授

第4展示室「アイヌ文化へのまなざし N.G. マンローの写真コレクションを中心に」 2020年12月22日（火）～2021年5月9日（日）

1. 展示趣旨

スコットランド出身の医師ニール・ゴードン・マンロー（1863～1942）は、1891年、横浜に至り、医業を営みながら考古学研究をおこなったほか、アイヌ文化にも関心を深め、1930年、研究活動の拠点を北海道の二風谷に移し、アイヌ文化を研究した人物である。歴博は、マンローがアイヌ研究の過程で作成した写真資料のほか、クマの魂を神の国に送る儀式（イヨマンテ）の映画フィルムを所蔵している。それらの写真・映像を、マンロー自身が残したテキストとあわせて展示し、マンローが、当時のアイヌ文化をどのようにヨーロッパ社会に紹介しようとしていたのかについて考える展示とする。また、撮影されている資料の大きさや素材などについて、来館者の理解を助け、また、関心を深めてもらうために、参考資料として、館蔵のアイヌ関係資料を選択して紹介する。また、展示場内では、マンローが制作した映画「The KAMUI IOMANDE」を、今回の展示用に再編集して上映する。

2. おもな展示資料

北海道沙流川アイヌ風俗写真（F-387）

北国の神秘を語るアイヌ写真帖（F-451）

献酒箸（イクパスイ）（F-210-1-17・33・42・48・54・59・74・75・76・78）

花矢（F-210-15-1, F-210-15-2・5・6）

儀式用の冠（サバンベ）（F-210-21-2・3・4）

行器（シントコ）（F-210-23-1・2・5・7）

鉢（パッチ）（F-210-8-7・17）

椀（トゥキ）（F-210-2-21・23・29・45）

天目台（F-210-2-8・22・24・32）

膳（オッチケ）（F-210-5-3・5）

宝刀（エムシ）（F-210-11-2・6）

宝刀を吊る帯（エムシアッ）（F-210-11-20）

アットウシの道具（現代）（F-471-21）

アットウシアミッ（F-471-29）

文様入りの大きいござ（オキタルンベ）（F-210-10-23）

小刀（マキリ）（F-471-4）

山刀（タシロ）（F-471-14）

仕掛け弓（クアリ・クワリ）の模型（F-530-5）

仕掛け弓用の矢（F-530-6）

マンロー制作の映画「カムイ・イヨマンテ」約17分（今回の展示用に短く再編集したもの）

原題：The KAMUI IOMANDE or DIVINE DESPATCH commonly called The AINU BEAR FESTIVAL

3. 関連行事

解説会（新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止）

4. 刊行物

解説シート, 広報用ポスター・チラシ

5. 成果と問題点

ニール・ゴードン・マンローのアイヌ研究の過程で残された写真資料と映画フィルムについての研究を、歴博共同研究「民俗研究映像の資料論的研究」(代表:内田順子, 2004~2006年度), 同「マンローコレクション研究:館蔵の写真資料を中心に」(代表:内田順子, 2006~2008年度), 人間文化研究機構連携研究「アイヌ文化の図像表象に関する比較研究—『夷酋列像図』とマンローコレクションのデジタルコンテンツ化の試み—」(代表:佐々木史郎, マンロー班総括:内田順子, 2006~2008年度), 科学研究費「欧米の人類学映画・写真に見えるアイヌ文化のイメージについての研究」(代表:内田順子, 2006~2008年度)などによって進め、これまでに、歴博研究映像「AINU Past and Present—マンローのフィルムから見えてくるもの—」(2006年, 監督:内田順子・鈴木由紀, 制作:内田順子・岡田一男, 撮影:谷口常也, 製作・著作:国立歴史民俗博物館, 製作協力:東京シネマ新社), 『国立歴史民俗博物館研究報告』(168集, 2011年), 国立歴史民俗博物館監修・内田順子編『映し出されたアイヌ文化』(2020年, 吉川弘文館)などにより、その成果を公開してきた。今回の特集展示では、マンローがどのようにアイヌ文化をとらえ、どのようにヨーロッパに紹介しようとしたのかという視点と、「プロローグ アイヌ文化への関心」「信仰への関心—クマ送りの儀礼を撮る」「手しごとへの関心」「日常生活への関心」「エピローグ」のテーマに基づいて館蔵の写真資料を選択・構成し、マンロー自身が残した言葉を手がかりとして、異文化を研究することの意義を考察することを試みた。これまで、論文や書籍の形で示してきた研究成果を、初めて展示として実現したことで、写真と映画との関係性や、そこに込められたマンローの意図、二風谷のアイヌ民族との信頼関係を、ひとつの空間において有機的に示すことができた。

課題としては、現在の二風谷のアイヌ民族にとって、マンローが残した資料の意義を問い直す試みが発見しなかったことである。2006年に完成した歴博研究映像「AINU Past and Present—マンローのフィルムから見えてくるもの—」において、同様の問いを立てて、その成果を映像の中で示したが、今回は展示の中で試みる予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、二風谷のアイヌ民族との展示における協働を実現することができず、今後の課題として残された。

6. マスコミの取り上げ

【新聞】

朝日新聞, 東京新聞, 千葉日報, しんぶん赤旗, 中外日報

【雑誌・ミニコミ誌】

ぐるっと千葉, 日経サイエンス, スペースマガジン

【テレビ・ラジオ】

ケーブルネット296

【その他】

ウェブ, ブログ掲載

7. 展示プロジェクト

◎内田 順子 本館研究部・教授

○川村 清志 本館研究部・准教授

特集展示(国際展示)「東アジアを駆け抜けた身体—スポーツの近代—」

2021年1月26日(火)~3月14日(日)

1. 展示趣旨

本特集展示は、2014年7月10日に学術研究交流協定を結んだ国立台湾歴史博物館(台南市)ならびに、2019年8月5日に学術研究交流協定を結んだ国立成功大学(台南市)との交流事業を通じて提案されたものである。2019年

には「展示協力協定書」を両機関と当館で締結した。

「展示協力協定書」にもとづき、以上の三機関は、2019年8月5日～6日に国際研究集会を共同で開催し、日本と台湾において、「近代化」の過程における身体の変更や近代オリンピックへの参加という近代史の基盤を共有していることを確認した。他方で近代化のプロセスは、アジア諸地域を植民地化した日本と、植民地化を被り戦後には脱植民地化を経験した台湾とでは、異なる側面も有している。そこで、さらなる研究集会の開催や共同の展示を行うことを通じて、日本と台湾の近代史への理解を深めることを目的に、次のように相互の展示協力の計画を立てた。

まず国立台湾歴史博物館では2020年10月から同じテーマ（近代東アジアのスポーツ世界と身体）のもとで特別展示を行い、当館では2020年7月から40日間を目途に特集展示を行う。国立台湾歴史博物館から1932年ロサンゼルスオリンピック陸上選手であった張星賢（日本植民地期の台湾人選手）の資料を借り受ける。

しかしながら2020年度は、予想できない新型コロナウイルス感染症の拡大により、日本と台湾の往来が不可能になった。日本側も台湾側も先の見えない延期が決定し、一時は開催が危ぶまれた。この困難な状況のもと、歴博では初めてオンラインによる両館のコンディションチェックと、教員現地立ち会いのない梱包・発送を実施し、半年遅れて2021年1月26日に開幕することができた。同年5月13日、14日には国立成功大学で関係シンポジウムをオンラインで実施した。国立台湾歴史博物館では7月14日に開幕予定であったものを、やはり新型コロナウイルス感染症の拡大により1か月遅らせ8月12日に開幕を迎えた。

2. 展示構成と主な展示資料

プロローグ

第1章 近代史のなかのスポーツ

第1節 鋳なおされる身体

第2節 スポーツを通じた近代化の波

第2章 帝国日本のスポーツとオリンピック

第1節 帝国日本のスポーツ

第2節 ラジオ体操の帝国

第3節 近代オリンピックと日本

第3章 世界を駆け抜けた台湾人アスリート：張星賢

第1節 台湾から東京、そして世界へ

第2節 早稲田大学時代とロサンゼルスオリンピック

第3節 満鉄時代とベルリンオリンピック

第4章 スポーツの戦後

第1節 ラジオ体操の改定、野球の復活

第2節 東京・札幌オリンピックの再招致

エピローグ

主な展示資料：

『新莊郡二重埔国民学校第二十八回修了記念帖』 体錬会 1942年 国立台湾歴史博物館蔵

「小学校大運動会双六」 清水泰五郎発行 1903年 本館蔵

「張星賢記録昭和6年4月至昭和9年2月記帳本」1934年 国立台湾歴史博物館蔵

「小遣帳」1931年 国立台湾歴史博物館蔵

「昭和11年張星賢撰、満洲日記」 1936年 国立台湾歴史博物館蔵

「張星賢任職満鐵時期代表日本参加第十一屆柏林奧運身著日本代表選手正式制服於奧運選手村」1936年 国立台湾歴史博物館蔵

「東京オリンピック開会式男性用ジャケット」1964年 個人蔵

3. 関連行事

サテライト企画展「世界を駆け抜けた台湾人アスリート：張星賢」 駐日台北経済文化代表處 4月15日～6月末
国立成功大学および国立台湾歴史博物館と共催：近代東アジアのスポーツ世界と身体」国際シンポジウム 5月13日～14日

国立台湾歴史博物館および国立成功大学と共催：東亞體育世界的台日運動交流國際展 8月12日～11月7日

※新型コロナウイルス感染症防止の観点から、歴博講演会、ギャラリートークは中止。

4. 刊行物

展示図録, 解説シート, 広報用ポスター・チラシ

5. 成果と問題点

第一の成果としては、新型コロナウイルス感染症の拡大による2度の緊急事態宣言（一度目は準備中、2度目は開催中）により、直接の往来、とくに資料のコンディション調査と借受が不可能になったにもかかわらず、オンライン会議により相互が工夫を凝らして資料調査と運搬が可能になり、開催延期のうえではあるが、2020年度では初めて国際展示を開幕までこぎつけた。これは当館史上初めてのことであり、大きな成果である。第二の成果として、包括協定のある国立台湾歴史博物館・国立成功大学だけでなく、韓国の孫基禎記念資料館からも画像の提供という協力を得ることができたことも、人の往来が不可能なかでは特筆に値する成果である。第三に、期間中の観覧者は9000人以上と推定され、緊急事態宣言下において健闘したといえる点を挙げたい。

問題点としては、何より感染症防止の観点からマスコミ対象の内覧会が中止になったこと、関係する講演会とギャラリートークが実施できなかったことを挙げたい。感染症下でどのように情報発信を行うかという点には課題が残った。

6. マスコミの取り上げ

【新聞】

朝日新聞, 毎日新聞, 産経新聞, 日本経済新聞, 夕刊いわき民報, 埼玉新聞, 新美術新聞

【雑誌・ミニコミ誌】

定年時代, 美術の窓, サンデー毎日

【テレビ・ラジオ】

チバテレビ

【その他】

ウェブ, ブログ掲載

7. 展示プロジェクト

【館内】

- ◎樋浦 郷子 本館研究部・准教授
- 西谷 大 館長
- 川村 清志 本館研究部・准教授
- 小瀬戸恵美 本館研究部・准教授

【館外】

- 荒川 章二 本館・名誉教授
- 金 誠 札幌大学 教授
- 江 明珊 国立台湾歴史博物館
- 張 淑卿 国立台湾歴史博物館
- 陳 怡宏 国立台湾歴史博物館
- 陳 明祥 国立台湾歴史博物館
- 劉 維瑛 国立台湾歴史博物館
- 謝 仕淵 国立成功大学

〔展示プロジェクト委員会〕

企画展示「加耶—古代東アジアを生きる，ある王国の歴史—」

1. 展示プロジェクトの趣旨

古墳時代の「倭」の社会は、朝鮮半島から多様な文化をさかんに受け入れ、取捨選択し、変容させ、みずからの文化として定着をはかる。それは須恵器や鉄器の生産、金工技術、馬匹生産、灌漑技術、炊事道具やカマドなど多岐にわたる。その中で最も頻繁な交渉を重ねた政治体が加耶であった。加耶はひとつの古代国家を形成することはなく、金官加耶、大加耶、小加耶、阿羅加耶などがいくつかの地域政治体がゆるやかな連携をはかっていた。その加耶の実態は、近年の韓国における調査・研究によってかなり具体的に明らかになっている。その最新の姿を墳墓や集落から出土した諸資料から提示し、あわせて倭との交渉様態を描くのが、本展示の趣旨である。

そのために、学術交流協定の締結機関である韓国国立中央博物館に資料貸与や展示内容についての全面的な協力を仰ぐ。中央博では2019年冬に、加耶の実態に関する企画展示を実施した。また、本展示は2020年秋に九州国立博物館にも巡回予定である。こうしたことから、本展示は歴博と韓国国立中央博物館及び九州国立博物館との共催展示としたい。また、総合展示第1展示室のテーマ4（倭の登場）、テーマ5（倭の前方後円墳と東アジア）の国際交流に関する内容やこれまで進めてきた韓国諸機関との国際交流事業、歴博共同研究「古墳時代・三国時代の日朝関係における交渉経路と寄港地に関する日韓共同研究」を展示の学術的な基盤とする。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

図録、展示室設計、演示具、展示パネル、ポスターなどの準備作業はほぼ終了したが、コロナ禍の影響のため、2020年7月に開催予定であった本展は、急遽延期となった。韓国国立中央博物館、九州国立博物館との協議によって、2022年後半期における開催を予定している。したがって、展示プロジェクト委員会は維持することとした。

3. 展示プロジェクト委員（◎：代表，○：副代表）

- 【館外】 梁 成 赫 大韓民国国立中央博物館考古歴史部 学芸研究官
 金 東 宇 大韓民国国立中央博物館考古歴史部 学芸研究官
 小嶋 篤 九州国立博物館展示課 研究員
 白井 克也 九州国立博物館企画課 課長
- 【館内】 ○上野 祥史 本館研究部・准教授
 ◎高田 貫太 本館研究部・教授
 仁藤 敦史 本館研究部・教授
 松木 武彦 本館研究部・教授

企画展示^{ジェンダー}「性差の日本史」

1. 展示プロジェクトの趣旨

本展示プロジェクトは、歴博基盤研究「日本列島社会の歴史とジェンダー」の研究成果を基礎に、列島社会の歴史をジェンダー視点に立って見直し、現代日本の抱えるジェンダーの歴史的淵源を探り、広く社会に課題を提起することを目的とするものである。特に、古代から近現代までを通して扱うことにより、日本列島社会において、男女の区分が制度化されたのはなぜか、また、そのようなジェンダーの制度化と変化のなかで、人びとがいかに生きたのかを可視化し、現代社会のジェンダーをめぐる課題へのヒントを見出す展示をめざす。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

2018年度5月5日、展示プロジェクト委員・基盤研究研究員による第1回全体会を開催、展示全体の目的とスケジュールを確認し、各時代ごとにグループリーダーを選出、以後、各時代ごとに展示プロジェクト会議を3～4回程度実施した。そのうえで、2019年度4月28日に第2回展示プロジェクト全体会を開催、展示タイトルおよび各時代の展示構成の骨格を確定し、以後時代ごとに展示資料の選定および借用交渉などの実務作業を開始した。2020年度は、コロナ感染拡大により、展示プロジェクト委員会を開催することが困難となったため、館内委員の打合せ、代表とチームリーダーや各委員とのオンライン打合せにより作業を推進した。また、エピローグ村木厚子氏インタ

ビューのための準備ズーム打合せ（7月3日）とインタビュー収録（8月22日）、ユーチューブによるフォーラム代替番組作成のための打合せ（6月25日）および滝乃川学園での演奏・講演収録（8月27日）を実施した。2021年10月5日内覧会終了後、最終展示プロジェクト全体会にて、展示開催までの活動総括をおこなった。

3. 展示プロジェクト委員

（五十音順 ◎：代表、○：副代表）

- 【館外】 池田 忍 千葉大学大学院人文科学研究院
 伊集院葉子 専修大学文学部
 長 志珠絵 神戸大学大学院国際文化科学研究科
 小野沢あかね 立教大学文学部
 加藤千香子 横浜国立大学教育学部
 久留島典子 東京大学史料編纂所
 小林 緑 元国立音楽大学音楽学部
 下江 健太 鳥取県埋蔵文化財センター
 清家 章 岡山大学大学院社会文化科学研究科
 田中 禎昭 専修大学文学部
 塚田 良道 大正大学文学部
 辻 浩和 川村学園女子大学文学部
 伴瀬 明美 東京大学史料編纂所
 東村 純子 福井大学教育地域科学部
 人見佐知子 近畿大学文芸学部
 廣川 和花 専修大学文学部
 福田 千鶴 九州大学基幹教育院
 松沢 裕作 慶應義塾大学経済学部
 水野 僚子 日本女子大学人間社会学部
 村 和明 東京大学大学院人文社会系研究科
 森下 徹 山口大学教育学部
 柳谷 慶子 東北学院大学文学部
 義江 明子 元帝京大学文学部
- 【館内】 内田 順子 本館研究部・教授
 ○小島 道裕 本館研究部・教授
 澤田 和人 本館研究部・准教授
 鈴木 卓治 本館研究部・教授
 仁藤 敦史 本館研究部・教授
 三上 喜孝 本館研究部・教授
 ◎横山百合子 本館研究部・教授

新・特集展示「海の帝国琉球—八重山・宮古・奄美からみた中世—」

1. 展示プロジェクトの趣旨

世界史上の大航海時代より以前、早くも14世紀代から東アジア海域世界では活発な交易がおこなわれていた。それを牽引した琉球は、単なる受動的な中継貿易国家ではなく、諸外国と複雑な外交交渉をおこない、積極的な交易活動を展開した海洋国家であった。その活動過程で、言語も習俗も異なる八重山・宮古や奄美に侵攻し、在地社会を大きく変化させた。その痕跡は、遺跡や遺物、伝承に残るのみである。本展示では、これまでほとんど注目されてこなかった琉球の帝国的側面に視点を据え、宮古・八重山や奄美といった周辺地域から琉球を捉え直す。

なお、本展示は平成27～29年度国立歴史民俗博物館基盤研究「中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究」（研究代表者：村木二郎）、および平成30～令和3年度科学研究費助成事業基盤研究（A）「琉球帝国からみた東アジア海域世界の流動的様態と国家」JSPS18H03592（研究代表者：村木二郎）の成果公開でもある。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

最終年度であるため、6月くらいに会議を開催して図録の執筆分担など最終調整をする予定であった。しかしコロナ禍のため実現できず、メール等のやりとりのみで準備を進めた。委員会が開催できたのは展示開催直前である。またギャラリートークの実施が不可能であるため、YouTube用動画「ギャラリー討論」6本を作成することになり、下記の通り収録した。

2021年3月14～15日 展示プロジェクト委員会

展示の最終確認、ギャラリー討論撮影、展示プロジェクトチーム内での内覧会

2021年3月22日 展示プロジェクト委員会

ギャラリー討論撮影

3. 展示プロジェクト委員（◎は代表、○は副代表）

- 【館外】 新垣 力 沖縄県教育庁文化財課 主任専門員
池田 榮史 琉球大学国際地域創造学部 教授
池谷 初恵 伊豆の国市教育委員会 文化財調査員
岩元 康成 始良市教育委員会 主事
小野 正敏 国立歴史民俗博物館 名誉教授
久貝 弥嗣 宮古島市教育委員会 係長
黒嶋 敏 東京大学史料編纂所 准教授
小出麻友美 千葉県立中央博物館 研究員
佐々木健策 小田原市文化財課 係長
山本 正昭 沖縄県立博物館・美術館 主任学芸員
- 【館内】 ○荒木 和憲 本館研究部・准教授
齋藤 努 本館研究部・教授
田中 大喜 本館研究部・准教授
松田 陸彦 本館研究部・准教授
◎村木 二郎 本館研究部・准教授

新・特集展示「黄雀文庫所蔵—鯰絵のイメージネーション—」

1. 展示プロジェクトの趣旨

安政2年10月2日（1855年11月11）に発生した安政江戸地震、いわゆる安政の大地震は、江戸の町に甚大な被害をもたらした。地震の直後から、被災状況を伝える瓦版などさまざまな刷物が売り出されたが、地震の元凶とされた地中の大鯰をモチーフとし、今日「鯰絵」と呼ばれる版画が大流行した。鯰絵は鹿島大明神や要石で制せられるもの、蒲焼きにして鯰を懲らす民衆、震災で潤った者たちと損失を蒙った者たちとを対比したもの、あるいは歌舞伎の一場面をパロディーにしたものなど、さまざまな主題と趣向を取り入れ、同年の12月に当局から禁止されるまでの間、200種を超えるものが発行されたといわれている。鯰絵には地震に対する恐れや震災後の世相に対する風刺、あるいは世直しへの願望など、民衆のさまざまな思いが投影されている。本展では、黄雀文庫所蔵の鯰絵コレクションを通して、未曾有の災害に遭いながらも、諧謔の精神でたくましく乗り越えようとした江戸の民衆の豊かな想像力を、主として江戸の都市文化の文脈の中でとらえようと試みるものである。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

新型コロナの感染拡大の影響もあり、年度前半は展示プロジェクト委員会を開催できず、もっぱらメール等で連絡を取り合い、展示の構成内容について意見交換をおこなった。12月に第一回の展示プロジェクト委員会を開催し、展示構成案をおおよそ固めた。3月に第二回の委員会を開催し、黄雀文庫収蔵品から展示作品の選定を終えるとともに、関連する歴博収蔵資料等による内容補足の案について検討をおこなうとともに、ポスター案など広報関連の検討もおこなった。

3. 展示プロジェクト委員（◎は代表、○は副代表）

- 【館外】 佐藤 光信 公益財団法人平木浮世絵財団・理事長

森山 悦乃 公益財団法人平木浮世絵財団・理事・主任学芸員
 松村真佐子 公益財団法人平木浮世絵財団・学芸員
 湯浅 淑子 たばこと塩の博物館・主任学芸員

【館内】◎大久保純一 本館研究部・教授
 ○島津 美子 本館研究部・准教授
 久留島 浩 本館研究部・特任教授（前館長）
 川村 清志 本館研究部・准教授

企画展示「学びの歴史像—わたりあう近代—」

1. 展示プロジェクトの趣旨

19世紀から20世紀半ば頃までを対象に、日本列島で近代国民国家とその構成員が生成される過程を、「学び」という切り口から総体的に見直し、展示で表現する。その際強く意識するのは次の2点である。まず、伝統から近代へ、欧米からアジアへ、中央から周縁へ、強者から弱者へとといった一方的な道筋から歴史を描くことはできるだけ排し、相互関係や双方向性から眺める観点。そして、学校だけが「学び」の場ではないという当たり前のことを歴史のなかからとらえ直そうとする観点である。基幹研究「学知と教育から見直す近代日本の歴史像」（2018～2020年度）の成果を展示という形で示すとともに、総合展示第5室のリニューアルを見越したものである。

具体的には以下の諸点がクローズアップされる。1 近世後期から幕末維新期の日本は、地理情報や言語などの相互作用を通じて、いかなる世界認識の進化・変化をなすに至ったのか。2 幕府によって開始された近代化は、明治政府によって継承されたため、旧政権の担い手だった者もその政策に参加することが可能だった反面、狭義の政治・行政以外の文化・教育といった分野では「敗者」とみなされた旧幕臣も特有の役割を果たしたのではないのか。3 明治の殖産興業政策の下、新たな産業とその技術が欧米から取り入れられた一方、在来産業はどのように自らを再生させることができたのか、そこでの博覧会の役割とは。4 病（やまい）との対峙。近世的「養生」から近代的「衛生」への変化に対し表出した違和感、感染症とのわたりあい、ハンセン病政策が新たに作り出す価値観とは。5 千島列島や「蝦夷地」のアイヌは自らの言葉で、自らの手で、どのように未来を描いたか。6 学校の登場。近代天皇制を背景とした学びの場を成立させるための舞台装置とは。また、音楽や体操を通じて行われる身体の「鏝直し」に対し、人々はどのように対峙したのか。

一見するとアラカルト風ではあるが、上記の諸テーマが持つ問題意識を総合することで全体としての時代像を描くことを目指す。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

基幹研究「学知と教育から見直す近代日本の歴史像」の研究会を兼ねた形で展示プロジェクト委員会を開催した。詳細は共同研究のページを参照。

3. 展示プロジェクト委員（◎：代表、○：副代表）

【館外】石居 人也 一橋大学大学院社会学研究科 教授
 小川 正人 北海道博物館 学芸副館長
 落合 功 青山学院大学経済学部 教授
 木村 直也 立教大学文学部 特任教授
 北原かな子 青森中央学院大学 教授
 塩原 佳典 畿央大学教育学部 准教授
 高木 博志 京都大学人文科学研究所 教授
 谷本 晃久 北海道大学大学院文学研究科 教授
 得能 壽美 法政大学 非常勤講師
 保谷 徹 東京大学史料編纂所 教授

【館内】◎樋口 雄彦 本館研究部・教授
 ○樋浦 郷子 本館研究部・准教授
 福岡万里子 本館研究部・准教授
 小瀬戸恵美 本館研究部・准教授

企画展示「中世武士団―地域に生きた武家の領主―」

1. 展示プロジェクトの趣旨

中世武士は、世襲制の職業戦士であるとともに、地域の領主としても存在した。中世武士の領主支配は、武士個人の力量によって実現したわけではなく、主に一族と家人によって構成された武士団という集団（組織）を形成することで実現した。そのため本展示では、武士団を戦闘集団ではなく「領主組織」という観点から捉える。中世武士が武士団という領主組織を形成して遂行した領主支配の実態と展開について、13世紀～15世紀を中心に、中世の文献・考古・美術資料のほか、近世～近代の絵図・土地台帳や現地調査に立脚して復元した本拠景観にもとづき、その具体相を展示する。事例には、豊かな資料を今日に伝える、益田氏・肥前千葉氏・越後和田氏を主に取り上げる。

なお、本展示は平成28～30年度国立歴史民俗博物館基幹研究（A）「中世日本の地域社会における武家領主支配の研究」（研究代表者：田中大喜）、同（B）「中世日本の国際交流における海上交通に関する研究」（研究代表者：荒木和憲）、ならびに令和1～4年度科学研究費補助金基盤研究（B）「西遷・北遷東国武士の社会的権力化」（研究代表者：田中大喜）の成果公開でもある。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

①2020年8月19日（水） 第2回展示プロジェクト会議（歴博第1会議室・Zoom併用開催）

田中大喜・荒木和憲による展示構成・展示資料の提示と、これらに対する検討・議論

②2021年1月28日（木） 第3回展示プロジェクト会議（歴博第1会議室・Zoom併用開催）

田中大喜・荒木和憲による展示構成・展示資料・展示図面の提示と、これらに対する検討・議論

田中大喜による開催要項案・展示タイトル案の提示と、これらに対する検討・議論

※関連する調査・研究会については、科研費のページを参照のこと。

3. 展示プロジェクト委員（◎：代表，○：副代表）

【館外】 小野 正敏 国立歴史民俗博物館・名誉教授
 角野 広海 島根県立石見美術館・学芸員
 高木 徳郎 早稲田大学教育・総合科学学術院・教授
 田久保佳寛 小城市教育委員会・係長
 出口 晶子 甲南大学文学部・教授
 中司 健一 益田市歴史文化研究センター・主任
 西田 友広 東京大学史料編纂所・准教授
 水澤 幸一 胎内市農林水産課・参事
 湯浅 治久 専修大学文学部・教授

【館内】 ○荒木 和憲 本館研究部・准教授
 河合佐知子 本館研究部・特任助教
 小島 道裕 本館研究部・教授
 後藤 真 本館研究部・准教授
 鈴木 卓治 本館研究部・教授
 ◎田中 大喜 本館研究部・准教授
 松田 睦彦 本館研究部・准教授
 村木 二郎 本館研究部・准教授

企画展示「集める・写す・伝える―蒐集と好古の文化史―」

1. 展示プロジェクトの趣旨

古いモノに関心を持ち、これを集め、伝えようとする行為は、前近代から存在する。実際にモノを集めることはもちろん、それが難しい場合は拓本や絵という形で、それらを集め、人々と情報を共有しようとした。こうした営みは、近代以降の博物館にもつながる発想であるが、前近代にはその前提として古器物に対する関心は広く、そし

て豊かに存在していたのである。本展示では、館蔵資料の『聆涛閣集古帖』（幕末～明治にかけて神戸の豪商・吉田家が三代にわたり編纂した古器物図譜）に関する共同研究（『『聆涛閣集古帖』の総合資料学的研究』）の成果を中心に、前近代における歴史資料の分類や概念、古器物の情報共有を通じた「知のネットワーク」の実態を展示によって明らかにする。あわせて、機構の基幹研究プロジェクト「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」等の研究成果もふまえ、さまざまなモノを蒐集・整理し、これを伝えていった歴史について広い視野から展示する。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

2020年度は、1年を通じて新型コロナウイルスの感染がおさまらず、また県外在住の委員が多かったことから、対面による展示プロジェクト委員会を行うことが叶わなかった。展示に関する館外の資料調査についても同様の理由で先方との調整がつかず、中止を余儀なくされた。展プロという性質上、資料の熟覧をともなった対面の会議が重要であったこともあり、オンラインによる会議を開くことも難しかった。委員とはメール等で企画展示に関する意見交換を行った。

そのため、資料調査ならびに打合せは、個別に行わざるを得なかった。10月12日には、京都文化博物館学芸員の村野正景氏とともに、本館所蔵の『聆涛閣集古帖』古瓦部の熟覧を行うとともに、関連すると思われる館蔵資料の古瓦譜との比較検討を行い、企画展示についての意見交換を行った。また、11月26日に、共同研究の代表者であった東京大学史料編纂所准教授の藤原重雄氏が来館し、開催中の企画展示や総合展示をまわりながら、企画展示についての意見交換を行った。

3. 展示プロジェクト委員（◎：代表、○：副代表）

- 【館外】 藤原 重雄 東京大学史料編纂所准教授
 一戸 渉 慶應義塾大学斯道文庫准教授
 稲田奈津子 東京大学史料編纂所准教授
 落合 里麻 東北生活文化大学講師
 佐藤 洋一 学識経験者
 清水 健 東京国立博物館学芸研究部調査研究課工芸室
 徳田 誠志 宮内庁書陵部陵墓調査官
 古市 晃 神戸大学人文学研究科准教授
 村野 正景 京都文化博物館学芸員
 吉田 広 愛媛大学ミュージアム教授
- 【館内】 ○小倉 慈司 本館研究部・教授
 清武 雄二 本館研究部・特任教授
 島津 美子 本館研究部・准教授
 仁藤 敦史 本館研究部・教授
 村木 二郎 本館研究部・准教授
 ◎三上 喜孝 本館研究部・教授
 後藤 真 本館研究部・准教授

企画展示「歴博色尽くし」

1. 展示プロジェクトの趣旨

「色」をテーマとしたコンパクトな館蔵資料展として企画した。館蔵資料（複製・レプリカを含む）の中で、着色された資料を展示し、それぞれに解説を加え、全体として日本における色と人とのかかわりが浮かび上がる展示構成を目指す。また、資料の色彩・色材に対する科学分析から何がわかるかについても、あわせて示す。

2. 展示プロジェクト委員会の概要

2022年度の開催を目標に準備をすすめている。2020年度は新型コロナウイルスの流行の影響を大きく受け、2021年2月に1回展示プロジェクト委員会を開催するに留まった。委員会では、展示を以下の6つのコーナーから構成することとし、それぞれのコーナーの基本コンセプトならびに出展候補資料リストを2021年度の前半に開催要綱案として取りまとめることを確認した。また、2022年度には2020年度の開催が延期となった国際企画展示「加耶一古

代東アジアを生きた、ある王国の歴史―」が開催される可能性があり、その場合準備経費の大幅な削減を余儀なくされることから、企画展示室Aのみを使用する可能性を含めて考えることや、展示の造作ならびに図録の製作においては、簡潔でコンパクトな作りになるよう留意することを合わせて確認した。

○彩色された建築模型（坂本，濱島）○色見本の世界（鈴木，澤田，島津）○疱瘡絵と赤（大久保，関沢）○蒔絵・螺鈿における色彩表現（日高）○考古資料の色（高田）○隕石から作られた刀剣（齊藤）

3. 展示プロジェクト委員（◎：代表，○：副代表）

（◎は代表，○は副代表）

【館外】 濱島 正士 国立歴史民俗博物館名誉教授

【館内】 ◎鈴木 卓治 本館研究部・教授

○坂本 稔 本館研究部・教授

大久保純一 本館研究部・教授

斎藤 努 本館研究部・教授

澤田 和人 本館研究部・准教授

島津 美子 本館研究部・准教授

関沢まゆみ 本館研究部・教授

高田 貫太 本館研究部・教授

日高 薫 本館研究部・教授